

浄土

昭和十年五月二十一日
昭和二十四年四月二十八日
昭和四十九年八月二十五日印刷
(第三種郵便物認可) 毎月一冊一日発行
運輸省(特別授受承認誌)第三二五号
昭和四十九年九月一日発行

第
十
卷

第
九
号

1974

新連載

9

念仏ひじり三国志 寺内大吉

共は凡
夫なり

かみなり
史明子

史明子



共にこれ凡夫のみ

大本山光明寺法主

石井真峯

ご承知のようにこの言葉は太子憲法第十
条にあるもので、前文は「こののいかり」を

絶ち

おもてのいかり

を棄て、人の違うを怒

らざれ、人皆心あり、心各執るところあり、
彼が是とする所を彼は非とする、我必ずし
も聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず」、そし
て次に「共にこれ凡夫のみ」とあります。

このお言葉は今の時代にもなお生きてお
ります。

お互い人間はまことに勝手なもので何か
事が起ると、自分は少しもまちがっていな
い。相手が全部いけないのだと思ひ勝ちで
す。責任は全部あなたの方にあると言つて
自己弁護するのが普通です。しかし実際
そういうものでしょうか。相手に都合のよ
いことはこちらには都合が悪い。こちらに
よいことは相手には悪い。共に凡夫に過ぎ
ないのであって、是非の理はなかなか簡単
には定め難いものだというお言葉は実に尊
いと思います。

九 月 号



目

次

共にこれ凡夫のみ……………	石 井 真 峯
彼岸風物詩……………	梶 原 重 道…(2)
特集 此岸と彼岸……………	…(6)
——戸松啓真・梶村昇・成田貞寛——	
法然さまの形ちと心……………	松 濤 達 文…(14)
特集 私の好きな念仏者	
小川隆誠上人……………	須 藤 隆 仙…(18)
嗚呼、木原円隆先生……………	日野西 徳 明…(20)
南無阿弥陀仏と称えられる人……………	藤 田 得 三…(23)
法然上人霊場めぐり⑧……………	村 上 博 了…(26)
第12番札所欣浄寺・第13番札所阿弥陀堂・第14番札所正林寺	
経典に聞くシリーズ⑦ 仏説無量寿経巻下……………	村 瀬 秀 雄…(32)
念仏ひじり三国志⑤ 法然上人をめぐる人々……………	寺 内 大 吉…(37)
千姫の墓……………	田 中 祥 雄…(48)

—表紙 久住 静雄画—

〈カット大正大学美術部〉



彼岸風物詩

梶原重道

(浄土宗開宗八百年
記念慶讃事務局長)

此の岸である現実の世相は、心あるものにとってあまりにも汚れすぎ、濁りすぎた。

時代それ自体の動乱とか、変革とかの大きな動揺による変動とは、決して無縁ではないが、むしろそれらが本質的な原因であるにしても、そうした大きな動きとは別に、ささやかなわがくらしの周辺は、たしかにおだやかさを欠いてしまった。

朝日がのぼりそめた夜明けの静けさは、夜を徹して走る大きなトラックや一番列車の音で破られ、たちのぼる朝もやの美しさは、高層ビルや煙突にさえぎられて、お

もむろに姿をあらわす緑の山なみの風景など、今日ではもはや特定の場所までゆかなければ眺められない。

海辺の側にいながら、臨海は埋立てられ公害の震源地となり、おしよせる潮や波の音はきくよしもなく、はてしない海の彼方に没する夕陽のあかい夕焼けは、軽うじて雲間に映える朱色を眺めるほかにはなくなった。

思い起す心の動揺は、こうしたわが周辺の雑踏や、変りはてた造成の画一的な立体観から、かつての自然美への追憶とそれへの思慕である。

日とともに、時代とともにこのように変貌する此土に

立つての切望は、永劫に变りない彼岸への憧憬である。十萬億土の西方に、この憧憬の実現をねがい求める心のうづきである。

それはわが心のふるさとなのであるから。未来永劫にわたって、人間の存在のつづくかぎり、みはてぬ水平線の彼方を眺めつづけるのではなからうか。

降りつづく梅雨にぬれ、ひからびる暑さにやかれながら、からうじて堪え忍んできたわが身心は、それとなく感じられる涼味の気配とともに、今年もまた秋の彼岸会を迎えるのである。

うつりゆく自然のいとなみの中に、秋の静けさは、おのづからわが心を彼岸に移す絶好の季節である。

各宗本山の彼岸法要のテレビによる実況放映とともに、彼岸に入る。

莊嚴な儀式の振舞と読経の声は流れる。お仏壇の扉を開いて、信心深い老人はその時ご先祖へともしびをかかけ、香を献じる。管長さまの読経をわが先祖のみ霊に報じたいからという。

「おばあちゃん、このテレビお仏壇の方に向けたらええのに」うるわしい家族のひとつである。それは理屈

ではない祖母や、母へのおもいやりであり、同時にご先祖への追善回向の心である。

ある家庭ではテーブルにいた亡くなった父の声に静かに聞きいって、さまざまな追憶にひとときを過しながら、それにしてももう幾十年も前に亡くなった母の声が、テーブルにとつていなかったのが何よりの淋しさであると、こぼしあったということである。

こうした彼岸を迎えるたびに、毎年仏間に出入りし、仏壇の仏具をとり出して、縁側に新聞紙をひろげて、古い眼鏡ごしに丹念にみがいていた父の姿がなつかしい。そしてさまざまなお供物をいっばいお供えて、珠数を掌でもんでいた。「仏さまは何もたべないのに」と冷笑した幼い日のことを思いだしながら、いつのまにかその自分が父がしたと同じことをくり返す年になってしまったと述懐した人の話を思い浮べる。

母が亡くなった翌年のお彼岸から、大好物だったからといって、不器用な手つきで父が巻ずしをつくって、この味はお母さんの味とそっくりだよ、と自慢しながら仏壇にお供えした。その父がもう亡くなってしまっただけではそれを見て、それを喰べさせてもらった自分が、不器用でも巻ずしをつくらねばお彼岸がまた気にはなれな

くなつたと、書いていた人の文章を思いだすのである。

お彼岸は何といつても、墓参である。

考えてみればお盆にお参りしてから、忙しさに忘れていてそれ以来のお墓参りである。ご先祖の石碑の前でお花をあげ、お水をかけながら改めてお詫びをのべている。

お父さんがお酒がすぎだつたからといって、コップに一つでお供えをし、煙草をかかしたことがなかったからと封を切ってお供えをしているのもお彼岸の風物である。

私がいなくなつたらせめてお彼岸にはお墓参りをね、といった母のことばを思いだしながら、何がご先祖や、何がお彼岸やと反発した自分が、いつの頃からか好物だつたにしめをたいて、おむすびとともにお墓へお供えをしないと気がすまなくなつてしまつた。と話した人のことばを思いだす。

お花を供え、水をそそぎ、さあみんなお線香をあげなさい、と連れてきた孫たちに供えさせながら、「おじいちゃんのお父さんや、お母さんがここにいるのよ」と説明する。

「おじいちゃんのお父さんて、どんなやつた頭はげ

てたの？」

「おじいちゃんのお母さんて、めがねかけたの？ アアわかつたお仏壇に写真あつたわ」などと、過ぎ去つた故人とのつながりをもって、孫との楽しい会話のはづむのも、お彼岸の墓参でなければの風景である。

「このお墓はおじいちゃんの兄さん、このお墓はおじいちゃんの妹」など、石碑の一つ一つにお線香を供えながら語りきかせている孫を通じて亡き人への対話がそこにある。そしていつの日かこの孫たちは、またその通り語り伝えてくれるのではあるまいか。そのときおじいちゃんの新しい石碑がまた一つ加えられているであらう。

赤とんぼを追い廻して、「お彼岸の間は殺生をしてはいけませんよ」と叱られた経験も思えばもう五十余年も前のことである。

そういえば、だまって釣りにでかけた三人の兄弟が、十分もしないうちに車の接触事故を起して、やっぱりお彼岸に殺生するなと云われていたのに、報いてきめんやつたと後悔したという思い出が最近の新聞にでていた。大きな世間の騒ぎや、ものの考え方の激変の中でも、五十余年前に私どもが教えられた同じことが、どこかの家

庭の一隅にいまなお残されていることを、うれしく思うのである。

合理的だとか、科学性がないとか、とかくやかましくいわれている現代、理屈をぬいた素朴な家庭での育くみという暖かいものが、こうした親からの、自然の語りかけではないのであろうか。そうしてこうした家庭での育みが、今もつとも必要な時代であることを、しみじみと感ずる。

「お彼岸中は、おとなしくお仏壇を拝むんやで、亡くなったおじいちゃんや、おばあちゃんがみんな帰ってきやはるんやから」と云いきかされた幼い日の思い出が、いつも彼岸とともにめぐってくる。

「どこへ帰るん？」

「マンマンちゃんのおうちよ、鐘をたたいて拝みなさい、おじいちゃんやおばあちゃんの声がきこえるから」ときかされてじっと目をつむって手をあわせた日の思い出が、たまたまなくなつかしいのも彼岸がくるからである。つり残した軒端の風鈴の音をききながら、秋の彼岸はさまざまな追憶の中に、なつかしいもの、慕わしいものの思い出にひたる時でもある。簾入りで嫁いった娘がわ

が家に帰って、あれやこれやと懐つかしむ家族との話あいのように、わが心が暖められ、安らかな懐つかしさの中で、何となく形なきものと、無言の対話の交わせることのできるのが、彼岸のころというものではないだろうか。

朝早くから餅米をむしいそいそとおはぎをつくった母の心は、ご先祖のお帰りを待つ歓待のあらわれである。仏さまへのおとどけものである。このご供養がご回向なのである。

嫁入った娘たちが孫の手をひいて里帰りをしたとき、親はそのもてなしに心のすべてをささげる。わが娘がその子のよい親としていかに成長し、その母が年老いて腰が曲ってもこうした心に変りはない、うるわしい親と子の情である。

科学だの、知識だのと、大きく世の中が変り、賢いもの識りばかりが造成されてゆく現代であっても、このような素朴な親と子の感情がなくなつてよいはずはない。

この素朴な感情から、よりうつくしいものを眺めるところを育てることが、彼岸の回向であることを私は、今日のような時節だからこそしみじみと感じるのである。

特 集

此岸と彼岸



大正大学教授

戸 松 啓 真

彼岸の世界——それは吾々のまだ見ぬ真実の国であり、同時にまた懐しき魂の郷里である。これに対する此岸の世界は住みなれし虚偽の国であり、同時にまたその流浪の始を忘れられし他郷である。……

これは昭和の初め頃、当時の若き仏教徒を魅了した一冊の本、『彼岸の世界』（金子大栄著・岩波書店刊）の書き出しである。

浄土教の信仰というものは、凡入報土、即ちわれわれがこの世の生命を終った時に、西方浄土へ往生し、そこで永遠の生命を得るということを成立条件とするのである。もしこれを信ずることができなければ、何の意味もないものになってしまうのである。

かつて石井教道博士から、次のようなお話を聞いたことを思い出す。或る住職が法事のあとのお説教で、今日の仏様は西方浄土へ往生されたとお話をされたところが、御施主が、「住職さんは極楽が本当にあると思っているのか」とたずねられた時、グッと返答に困って何もいかなかったという。説教をする住職自らが信じられないものを、どうして他人が聞いて信じ得るだろうか、困ったことだといわれた。

私もかつて大正大学の学生であった頃、望月信亨博士の『観経疏』の演習の時、それは最終の授業で今日は何を質問してもよろしいというので、思いきって聞いてみ

た。「先生、西方極楽浄土は本当にあるのでしょうか」と。その時、私はその数年前に先生がある公式の席上で、指方立相の浄土に対して否定的なお話をして、物議をかもしたというのを聞いていたので、どのような極楽浄土存在論が聞けるかを期待したのである。しかし、先生は少しうつむきかげんで、「ウン、あるんじゃない」といわれただけであった。私は大いに不満であった。

それから三十数年の歳月がたち、望月博士も石井博士も阿川貫達先生も、すでに亡く、私もまた人生の半ばを過ぎてしまった。

そしてはからずも、宗学を研究し、宗学を学生に説く立場になった今、なんのわだかまりもなく、私が死んだら西方浄土へ往生させていただくのだと信じられるようになった。そのようになったのは、いつからであり、どのような契機であるのか、自分にははっきりとわからぬが、それは宗祖をはじめとする祖師方の教えとその実践、私自身の戦争をはじめとする、さまざまな人生経験の総和であろうけれども、あの望月博士の一言を聞いた時の光景は、今になってもはっきりと浮んでくるのである。

その昔、聖光上人や親鸞聖人や熊谷蓮生房などの御弟子達が、師である法然上人の言葉を信じて、ひたすらに

彼岸の世界を求め、波瀾に富んだものであったろうが、充実した幸福感を持った念仏の生涯であったと思わずにはいられない。

この場合の信ずるということは、それによって目が開けることである。目が開けるといことは、此岸の世界が如実に見えてくることである。それまでは、此岸の世界にいて此岸を見ながら、此岸の現実が見えなかったのである。うれしいことをうれしいと思わず、白いものを黒とみる、欲してはならないものを欲する。いわばとらわれの世界であった。

それが死んで行くべき彼岸の世界を信ずることによって、此岸の現実を無意味なもの、厭離すべきものとするのではなくて、かえって現実にとらわれなく、随順して行く根拠を与えるものとなったのである。此岸の世界が、生死の迷界でありながら、念仏を称え、彼岸の世界を信ずることによって、死生ともにわずらいのない生活になることを、法然上人はその御法語でのべられている。それは大安心の世界ということができるのである。

此岸とは「この世」であり、生死の迷界であり、彼岸とは「あの世」であり、涅槃寂静の世界である。

彼岸の世界について信を立つるといことは、彼岸の

世界が、此岸の世界に働くことでなければならぬ。そうでなければ、西方浄土は「あの世」のことだけになっ
てしまうからである。彼岸の世界が此岸の世界に働くとい
うことは、永遠と一つになることであり、浄土の阿弥
陀仏と離れないことである。



亜細亜大学教授

梶村昇

(一)

お彼岸が近づいてきました。そこで一度たしかめる意
味で暦を見て下さい。お彼岸の中日が国民の祝日「秋分
の日」となっております。秋分とは辞書を調べますと、
昼と夜の長さが等しい日と書いてあります。ということ
は、昼と夜の長さが等しいから日本人は国を挙げて祝日

にしているということです。なんと奇妙な話でしょう。
それならついでに夏至も祝日にしたらどうでしょう。お
かしな、おかしなことが戦後の日本には横行しています。
こんな結果になった経緯はわからないでもありません。
昔はこの日を秋季皇霊祭といいました。天皇が歴代
の天皇、皇族の御霊をお祀りする日でした。そして国民
は「お彼岸」といってお墓参りをしていたのです。いわ
ば国を挙げての祖先崇拜日であったわけです。この行事
は奈良時代の昔から今日にまで続いている日本の伝統的
行事なのです。皇霊祭という制度は明治十一年六月に制
定されたのですが、皇霊祭の日がこの日に決ったのも、
昔からの伝統にのっとったわけです。

しかし新憲法になって、宗教と国家との結びつきを極
度に排した結果、「お彼岸」は仏教的、「皇霊祭」は神道
的というわけで、そのいずれをも排除して、宗教とは無
関係の天文学の用語である秋分・春分という言葉を用い
ることにしたのだと思います。お陰で日本人は昼と夜の
長さが同じになると国を挙げて祝日にする世界で唯一の
国となったわけです。日本人は理解できない民族だとい
われるのも無理からぬことです。それほど宗教と政治の
密着が困るなら、「祖先崇拜の日」とでもしたらいかが

でしよう。「敬老の日」もあるのですから祖先を崇う日もあってよいでしょう。祖先といい、崇拜というのは宗教的用語だからダメだというのでしょうか。

(11)

実はこのようなことを書くつもりはなかったのですが、どうもこのごろは拘子定規の石頭が多くて、「彼岸と此岸」というようなことを書き始めると、すぐにナンセンス、子供だましなどといって受けつけようとしませんので、その石頭（本人たちは科学的な頭と思っているようですが）の人たちの考えたバカさ加減の一例を書いてしまったということです。

さて彼岸と此岸ですが、此岸とは現実のこの世界のことですといえは石頭諸君も分ってくれるのですが、彼岸というともう分らなくなってしまう。「それはどこにあるのか」「西の方十億土のかなたにありますが」「ナンセンスノ西へ西へ行けば地球は一廻りするだけだ」というところがオチです。

宗教をこのような論法で批判すること自体がナンセンスであるということに、まず気づいてもらわないと困ります。「イエス・キリストは死後三日目に復活されました」

た」「そんなことは生物学上ありえない」こんな議論をいくらしても無益なことです。それよりもイエスが三日目に復活されたとはどういう意味を含んでいるか、どうして弟子たちはそう思うようになったのか、と考えてもらわなくては宗教はおからないうです。いや本当の人生の味は分らないのです。

彼岸がある、とかない、とかいうことは実体の有無ではないのです。いわば感知せられる世界での有無なのです。このようなことをいうと石頭諸氏は「宗教ではすぐにそのようなことをいう。それは人間がこしらえあげた幻影的観念であり、空想的イデオロギーである」といいます。しかしいかに石頭といっても感知せられる世界を全然もっていないということはないでしょう。ちなみに石頭君に聞いてみたい。「君の恋人はどんな人ですか」と。彼はいうでしょう。「やさしい、おとなしい人ですよ」と。この答えは感知せられた世界での返事ではないでしょうか。それとも彼は頑強にこれを拒んで「身長一六〇、体重五〇、バスト、ウエスト」と科学的(?)に答えるでしょうか。こんなことをいっていると、恐らく石頭同志の友人からさえ「彼はおかしな奴だ」と感知されてしまうでしょう。

しかしこのような人に彼岸ということはどうしても分つてもらいたいと思うのですから、少し話を変えて言ってみます。深い深い光りも届かないような海の底の方には、眼の無い魚がいるそうです。光りがないから眼も必要なくなってしまうたのでしょうか。私たちは眼のあることを当然とと思っているようですが、実際は光りがあるから眼があるということだったのです。このようなことは忘れてしまつて、逆に眼があるから光りがわかるようにさえ思っています。光りがあるからこそ、闇が闇と分るのです。私たちの人生も同じでしょう。生きているとつくづくと自分がいやになることがあります。それは人生における闇です。闇が闇と分るのは、人生に光りがあるからです。自分の至らなさが分るということは、至れるもの、完全なるものがあり、それに照らされているからであるということではないでしょうか。この世を完全なものと思つてゐる人は誰もいないでしょう。この世が不完全なるものと分るということは、完全なる世界に比べるからでしょう。この完全なる世界を象徴的に「彼岸」といつてゐるのです。あるとかないとかいうことはこの意味で考えなくてはならないのです。

それでも「彼岸」は人間のこしらえあげた幻想的観念

でしょうか。第一、不完全なる人間がこしらえあげた幻想に、人間が何千年という歴史を通じて帰依しつづけてきたということでしょうか、それほど人間は愚かしい存在なんでしょうか。しかもその愚かしさが石頭諸君の時になつて解放されたともいふのでしょうか。それを信ずるほど人間は愚かしくありません。

お互いにもう少し私たちの感性を大切にしようではありませんか。自分たちの作つた規則に縛られて身動きできなくなつたり、眼に見えるものでなければ頼りにならないと思つたりするのではなく、感動する人生を送ろうではありませんか。何でも結構ですが、あなたが感動したときのことを思いだしてみて下さい。感動するということは、エゴにとらわれた我を超えるということです。たとえば、友人が身を捨てて人のためにつくした、ということを聞いて、身のふるえるような感動を覚えた。この時にその人は自己を超えた世界にわが身を置いているのです。彼岸が此岸の体験となつたということです。彼岸が此岸の生のうちに感知せられたということです。このようにして此岸は彼岸の光明に導かれて生かされていくのです。彼岸は浄土であり、念仏は感動の声なのです。そして「救われた」ということは、いのちを感じる

こと、すなわち、エゴにとらわれた生が永遠なるものとつながることを感知したということでしょう。お彼岸を迎えてお互いに人生をふりかえってみようではありませんか。



仏教大学教授

成 田 貞 寛

蔓珠沙華、ひとむら燃えて、秋陽つよし

そこすぎている 静かなる道

残暑を思わしめると共に、お彼岸の近きことを感ぜしめる句であります。

国民的行事としてのお彼岸を迎えるにあたり、はるかなる願いを語ることも無駄ではないでしょう。

×

×

彼岸とは、此岸に対しての言葉であることは、容易に

理解されるでありましょう。しかし、仏教でいう彼岸とは、くわしくは到彼岸、または度彼岸ということです。

此岸より彼岸に到るとか、わたるとかいう意味ではありません。此岸を現実界とすれば、彼岸は理想的解脱界（涅槃界）を指しております。従って、到彼岸とは、現実界より理想的解脱界に到り度たることを意味しております。

ともあれ、仏教では此岸である現実界とは、どのようなところを意味しているのか。理想的解脱界とは、どのような所を指しているのか。さらにまた理想的解脱界に到る道には、どのようなものがあり、それらの道はどのような風光をなくしているのか。どの道が私たちに相応しているのか等が示される所に、教えの全体が語られているということができましょう。

八万四千の法門は、みなこれ苦海をわたるの法船なりといえども、六八超世の本願は、ひとりよく常没（衆生）を救うの教網となす。

という言葉がありますが、その間の消息を物語るものがあります。

×

×

さて、仏教では此岸である現実の人生をどのようにとらえ、どのような世界に住んでいると見ているのでしょうか。

うか。仏陀は人生は苦なり、と説いております。そしてその原因を愛欲なり、我執なりと説いております。そしてやがて我執にとざされた行為的世界を説いて、この世を變転さむまりなき迷妄の世の中として、凡ての対象（志向するもの）に動乱されている人生を語るのであります。現実の人生がいかに苦惱に満ちたものであり、私たちの意識がいかに闇の深さにとだされているかが理解されるのであります。いかに此岸が穢れた世界であるかが感ぜられるのであります。

ここに於て、一方では、此の世界をあくまでも淨めて、差別動亂を離れた理想的解脫界に到らんとする、いわば善業をなすことによつて一如靜寂の境界に至らんとする道が説かれるのであります。しかし、他方では、現実の煩惱業になやみ、人間性への反省自覺によつて、現實に絶望し、ただ彼岸の解脫界（西方の淨土）に往生することのみがただ一つの道であるとして説かれるのであります。

ここに於て思いまするに、前者はいかに善業によつて此土を淨めることに重点がおかれておりまして、所詮、慚愧の心に於てなさるべきであり、いかなる行為もお互いに共通の業（行為）として深い責任のあることを

感ぜしめるものがなければなりません。この点、淨土を實現せんとするの願いに進むものも、その困難なることへの反省に於て、往生への望みをもつものであるということが出来るであります。また後者に於ては、いかに現實に絶望せるといへども、絶望に止まっておることのできぬものであります。それはやがて無限の理想につながるものであらねばなりません。即ち無限の理想を弥陀の本願に托し、その淨土を以て人生の帰趣とし、口称念仏の一行を以て、此の土を淨むるの實現を意欲しているといわねばなりません。

x

x

ともあれ、何れの道を選ぶかは、人それぞれの因縁によつて異なることであります。そこに目ざさるる理想的解脫界（彼岸）の様相は、何れの道を辿るかによつて、異つた趣を以て、私たちに語られているということが出来るでしょう。私は特に後者に於ける彼岸の様相が如何に説かれているかについて関心をもつものであります。

古代インドの仏教の論師、世親によりて、次のように語られております。

彼の世界の相を觀るに、三界の道を勝過せり。大空の

ごとく究みなく、廣大にして辺りなし。大いなる慈悲の心の、世を超えし善より成る。

お浄土と呼ばれる所以を明かすと共に、その徳相をあらわせるものであります。即ち浄土とは永遠に迷いの道を断つところであり、その徳相として、大慈悲の世界であり、光明無量の世界であり、妙音の聞ゆる世界であり、無量の香りあまねく薫り、仏法味を愛樂し、禪三昧を食となし、触るるもの勝樂を生ずるの世界であると説かれております。それは差別動乱やむことなき人間生活に対応して、説かれていると考えられるのですが、それは人間をして静寂なる解脱界（涅槃の彼岸）へと帰せしめるものであることが感ぜられます。そこにこそ、浄土が大涅槃界といわれ、阿弥陀仏の願心の世界であるということができるのであります。

何れにいたしましても、法然上人に於ては、さとり境界としての阿弥陀仏の浄土（彼岸）は、これを味うものに於てあるものであり、それよりも阿弥陀仏の大慈悲によりて、成就せられた願心の世界であるから、願心に従つて口称念仏にはげむ所に浄土の実在があるとして、願心所成の浄土を説くことに重点がおかれているようであります。

ひるがえって、現代を考えますに、あまりにも物豊にして、心まづしきを感じるものであります。如何に公害の問題、教育の問題、社会福祉の問題が叫ばれても、精神生活の向上、魂の問題が解決せられなければ、永遠に問題は残るものと思われまふ。ここに彼岸への道を考えることの必然性があると思ふものです。

私は稿を結ぶにあたり、お互いが共業所感の世にあることを理解しあい、我執に沈む行為的世界に住むことへの反省を深め、人間生活の限界を知って、彼岸（浄土）への思慕を新たにすると共に、口称念仏に励むことを思ふものであります。法然上人の御歌に

阿弥陀仏と申すばかりをつとめて

浄土の莊嚴見るぞうれしき

と仰せられております。称名念仏にはげむ者こそ、この世にあって、この世を超えた、無為涅槃界（彼岸）にあそぶ法悦の境をうたわれたものと思われまふ。彼岸への道の究極を示されたものでありまふ。

彼岸について、語るべきことは多いのですが、ここでは此岸と彼岸について、更には此岸より彼岸に到る道について、述べさせていただいた次第であります。



法然さまの形ちと心

松 濤 達 文

(東京下谷最上寺住職・画家)

「わが心の法然上人」ということで話をするよう言われましたが、念仏に活かされている毎日の生活の中でも私は絵を画く心の中に一番活かされているように思われるのです。私は坊さんであると同時に画家でもあります。学生時代に仏画で有名な野生句香雪先生に、教えを受け、精進してまいりました。以来三十年になりますが、いつも初心にかえり、念仏申し申し画いてまいりました。

本年は浄土宗開宗八百年に当りまして、この記念を宿縁にして、法然上人伝や、法然上人絵伝等を書く多くの機会を得ましたことを、誠に有り難く思っております。放送を二回に亘り致すことになりましたので、最初は法然上人のお姿について述べ、次回に、そのお姿から私なりに受けた、法然上人の御心をお話いたします。

先づ、法然上人のお姿と申しますと、京都知恩院にあ

ります隆信の画いたお絵像と、託間法眼が書いた、京都嵯峨二尊院にある足引の御影が、眼の辺りに浮かんでまいます。そのお姿は、ずんぐりと芯の強さを秘めた内に、優しさと気品が感じられます。頭は、法然頭と言われる程に特長のある形をして、頭のとっぺんと額との間が窪んでいます。

次に耳を見ますと、形は大きく、耳たぼは厚く、幅も広く、いわゆる法然耳と申しましょうか、ふくよかな感じを受けます。右の目は、上下の瞼はごく自然に開かれています。左の目は上瞼がかぶさっているように見えます。唇は素朴な人柄を感じさせます。

そして顎は、張っているように見えます。両手で数珠をつまぐり、数珠がたえず回るように見えるのです。念仏を唱えていらっしやるのでしょうか……。黒い衣を着

て、黒又はねずみ色の袈裟を着けています。隆信や託間法眼の画いた法然様二尊だけではなく、弘願本、古徳殿、琳阿本、勅伝等の絵巻物の中の法然上人のお姿を見ましても、皆、黒衣と墨袈裟をまっとっておりま。いかに素朴な人柄でいられたかが、うかがい知ることが出来ます。

浄土宗の辞典に、足引の御影の由来が次のように書か

れています。九条兼実が、法然上人を崇敬する余り、上人のお姿を写して、持仏堂内に安置したいと希望したところ、上人は「私のような者の姿を高貴な関白である貴方の屋敷に置くことは恐れ多い」と言われ辞退されました。そこで兼実は或る時、法然上人を招いて浴室に案内し、沐浴が終って、内外衣を着して、片足を投げ出して休息されている所を、絵師の託間法眼に命じて、簾越し



法然上人御真影（藤原隆信筆）（国宝）

総本山知恩院所蔵

にひそやかに写させました。その後、上人が、兼実の屋敷を訪ねた折に、兼実はこの肖像を前に掛け、この絵像に魂を入れて慈しいと願ひ出されました。いわゆる開眼供養をお頼みしたのでした。上人は驚いて、この足が出ている姿は真にはずかしいと祈念されますと、忽ちに肖像の足が引き込まれたということです。之は上人のお徳と絵師の巧妙さを示す逸話として伝えられています。しかし此の「あしびき」という言葉は山にかかる枕詞であり、この絵像のある二尊院が、小倉山の山中にある所から、他の処にある御姿と区別する為、小倉山の二尊院にあ

るお姿を、昔の人々がしゃれて語呂を合わせて、足引の御影と呼んだとも思われます。

何れにしても、前に申しした隆信の法然上人像にしても、上人のお姿を偲ぶにふさわしい画であります。この絵像からは、慈悲の心と強い意志の素朴な法然さまが、私の心に伝わって来ます。そこで、次回は絵像を通して法然さまの心を話して行きたいと思っております。

（浄土宗の時間放送原稿第一回より）

先週は、法然上人の御姿について、あらまし申しあげましたが、隆信の法然上人のお姿を例にとりまして、そのお姿から、私の心に、響いてくる心の法然上人像をお話したいと思えます。

先ずお顔を見ますと阿弥陀様のように、面に慈悲、内に智慧をかね備えていられますが、尚、心の素朴さと、無間に修業を続けていられる勇猛堅固な信念が、私に伝わってきて、心がひきしめられます。

右の目からは、智慧と強い信念の心が伝わってきますし、左の目は慈しみを持って衆生を救い給う阿弥陀様のように、語りかけております。次に、耳を見ますと、耳

たほが大きい人の事を、ふつう長者の相をしていると言いますが、法然さまの耳は、まさに心の長者の耳という意味で、法然耳といわれるゆえんが、そこにあると思います。又、顎が張っていますが、ここにも意志の強さが感じられます。事実、保元・平治の乱に遭われ、東大寺が焼かれるなど動乱の世の中に念仏の教えが盛んになると、一方邪まな教えが出て、念仏の責任は皆、法然さまの上にかかり、念仏を反対する狼火の声もあがりました。又、流罪に遭われるなどの数々の災難の中にも、念仏一筋に、救いの道を信じて進まれた信念がその相に良くあらわれております。

私達が今も、法然さまによって救われ、活かされておりますのも「一心に専ら、弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、之を正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」というお教えを示された賜であります。南無阿弥陀仏を唱えていられる法然さまの口許は、南無の無の口をしています。南無とはナモーと、元来発音します。心から、帰命し敬い礼すと訳します。心から、尊敬します、頼りすがります、お辞儀をします、という意味で、その法然さまの口は敬いの口をしています。そして、私の心に南無阿

弥陀仏の声となって聞えてきます。

次に、手を見ますと、ふくよかな温かい感じの手をしておられます。仏の手足は、手足柔軟の相と言いまし、やわらかで貴い相をしています。法然さまの手も同じ形に見えます。口で南無阿弥陀仏と唱えながら、両掌で数珠をつまぐるお姿は、今にも数珠の音が聞えそうです。

今までお話した事でも分りますが、仏と一体になつてしまわれた有り難いお姿です。法然さまが遺された一枚起請文の中に、お念仏を唱える三つの心構えと、四つの唱え方が書かれておりまして、四つの内の一つに無間修と言ひまして、絶え間なく念仏を唱えるという事がありますが、法然さまのお姿は、まさにこの無間修にあたります。衣は、墨染の衣を着ておられますが、修業僧の墨染を召して、自分は、いつも修業の身であるとなされ、一生を通じて心と形が変らなかつた方でした。本当に立派な事と思います。私は、この心を心として、絵を画いていきたいと願ひたしております。

袈裟はと申しますと、之も又、一番粗末な墨染を身に着けておられます。袈裟に就いて少し説明致します。う。お釈迦さまをはじめ、弟子達は糞掃衣をまとい

ました。糞掃衣とは道端に落ちている布地や、糞のついてゐる布、切れた布、その様な粗末な物を集めて、洗い直し、切り揃え、土の中の水に浸けて、汚れの目立たない渋い色一色に染めた物を縫ぎ合せて、お袈裟として着られました。之は欲望の対称にならないようにと、心がけたからです。坊さんは、欲から抜けきらねばなりません。ですから、粗末な物を着るのが、本来の生き方であります。それが、当然の心の表われにもなります。出家者は、粗末な衣をまとい、世の為、人の為に尽すのが、真の僧であると、法然様は墨染の衣に粗末な袈裟を着けられて、一生をこの姿で過されたのでした。心から阿弥陀仏を敬い、「心の乱れたままでもただ阿弥陀仏の御名を称えられれば、本願の御心によって、必ず往生が出来る」と深い信念で、人々に教えを説き、救いの掌をのべられたのでした。

墨染の衣を纏つた法然さまだからこそ、八百年後の今も、私達の心の中に生きていられるのだと思います。之で、私の心に響く法然さまのお姿のお話を終らせていただきます。

（浄土宗の時間放送原稿第二回より）



特集 私のすきな仏者

小川隆誠上人

須藤隆仙

(函館市称名寺住職)

“私のすきな念仏者” といえば、まず第一に私の故師僧をあげなければならぬ。

師僧小川隆誠上人は、温厚にして人格高潔、まさに法然上人のみ教えの忠実な実践者であられた。今日、不肖の私は、そのみ跡を継いで、一層自分の至らなさを知り、師僧上人の偉大さに低頭するのみである。

小川上人は、三祖良忠上人と同じ石見の国（島根県）に生まれられ、当時としては必要以上に白眼視された私生子であられたためか、浄土宗の寺に入れられて、学校にも満足にい

けぬ厳しい修業の日々だったという。それでも後年良師を得て、人よりだいぶおかれて京都の東山中学に入り、仏教専門学校へと進んだ。卒業後、島根県福城寺の住職をするかたわら、先住小川徹竜師が住職する北海道函館市の称名寺に勤務し、ついにその人柄を見込まれて徹竜師の養子となって小川姓を継ぎ称名寺住職となった。

私の口からいうのもなんだが、称名寺という寺は浄土宗辞典などにも北海道随一と書かれている大坊で、世界最大の漁業会社といわれた日魯漁業株式会社なども、会社としてその

檀徒となっているのである。正保元年（一六四四）の創立で、江戸時代には幕府の函館奉行の仮本陣とまでなった寺である。

右の日魯漁業では、いまでも毎年秋に、漁獲した魚類や、殉職した従業員のための大施餓鬼法要を同寺で行っているが、戦前は同会社も飛ぶ鳥を落とす勢いの時代で、その法要はたいへんなものであった。

ある年のその施餓鬼法要のおり、当時執事をつとめていた師僧は、客便所が汚れているのに気づいて、こっそりと掃除しておいたのであった。その頃は多くの寺僧がおり、また寺男も数人おったのだが、師僧はこれを人にいつけず、自分でやっておいたのである。後にそれが徹庵住職に知れて、徹庵師はひじょうに感心し、「今日のお布施は、みな隆誠にやってもよいな」といわれたそうである。誰かが後年この話を聞いて、昔の『浄土』誌に、「函館称名寺の小川住職は、便所掃除をして住職の座を得た人だ」と書かれたこともあったという。

ほんのちょっとした話のようではあるが、故師僧のご生活は万事がこのような生活であられた。名誉や利益のためになされるのではなく、ただその事自体に誠心誠意動かれるのであった。

元祖上人が教えられたお念仏とは、「一心専念」ということであられる。「一心に専ら念ずる」ということであられる。それがまた善導所立のお念仏、つまり善導大師によって初めて開発された専念念仏であった。聖道門にも念仏はあるが、それは一心専念ではない。一心専念の念仏のみが、彼の仏の願に順ずるのである。そしてこの一心専念ということは、じつは念仏者が人間生活をする上の根本理でもなければならぬと思う。一つの仕事に取組んだら、誠心誠意それをやりとげる。いついかなる動きに対しても、一心であり専念でなければならぬと思うのである。

故師僧こそ、全くそのとおりのお方であられた。日々の所作、動きの一端が、すでに念仏であられたのである。

またこんなこともあった。師僧のご自宅に飼っているメス猫が、春になって、それこそ恋猫になったのである。うるさく鳴きさわぐのであるが、たまたま周辺に野良犬が横行して、オス猫がくることができないのである。メス猫はしまいには狂わんばかりに鳴きさわぎ、ついに師僧は可愛相だといって、その猫を前掛にだいて、街に出たのであった。寺からさほど遠くない雑貨店の角においてきたというのである。「あの辺ならのお、ムコさん猫もたくさんおるけのお、それに遠くないから用がなくなったら戻るだらうて」、師僧はそ

ういわれて、いかにも満足しておられるのであった。ところが平素、人家から離れた寺の奥で育った猫は、ついに帰るすべを知らず、そのままになってしまったのである。師僧は「悪いことをした。悪いことをした」といって悲しまれるのであった。

しかもこの話には後日譚があるのである。その雜貨店に、勝れた学者がおられて、本州の某大学の教授をしておられ、たまたま師僧が猫を放したとき、帰郷していてそれを見ていたのである。その教授は、てっきり師僧が猫を捨てていったのだと思い込まれ、私に会うたびに、「あの方丈さんはなんだ。猫を捨てていったではないか。宗教家として失格だよ。憐愍の情などないではないか」といって、なじるのであった。私は実情を知っていたが、師僧はいかなることに決して弁解がましいことをいわれなかった方だったから、私もまたその教授に実相を一言もいわずにいるのである。

師僧のお念仏を申されるのも、また格別であった。長い廊

下を歩かれるときは、よく低声でお念仏を称えられながら、廊下に落ちているゴミを丹念に拾われるのであった。これもある人が「大坊の住職らしくない」と評していたが、師僧は人様からの毀誉褒貶など全く意に介さずにおられるのであった。

昭和三十一年一月二十九日、師僧は六十三歳で札幌北大病院で亡くなられた。脾臓癌であった。腹を十字に切るという大手術で、ついには尿毒症となり、いうなれば全くのバカ同様になられたが、右手を懸命に動かして、口をモグモグされるのだそうである。私は函館の寺を護っていなければならぬので、兄弟子が付添いをしていたが、尿毒症の体で、懸命に木魚を打つようにして念仏を称えているらしい姿には、同室の病人も医師も驚いておられたということであった。「私のすぎな」というよりは、私の「最も尊敬する」念仏者の上人であられた。

呼 鳴、木原 円 隆 先生

NHKの人生読本などを聞いていると、よく「良き師との出会い」が話題になっている。そういえば私も、小学校以来、常に沢山の良き師に恵まれて、今日に及んでいる。仕合せ者である。

今本誌から「私の好きな念仏者」という仮題を、与えられて一番に、頭へ浮んできたのは、木原円隆先生である。先生は、得度間もない私に、尊い人生訓を教えて下さり、さらにまた、立派な御往生を示して私達の、模範となつて下さった事など、特に思い出が多い。

私が数え年十五歳で、尼衆学校の門をくぐった時、先生は幹事をしておられたが、小柄で色の浅黒い丸顔、お爺さんかと思つたほど「女離れした尼僧さん」という印象をうけた。いつも引締つたお顔で、お念仏しながらジツと、生徒を見つめておられる、そのお眼は厳しかった。しかし、先生のお眼と眼が合った時は、これまた、途方もなく優しい笑顔を見せて下さるのである。だから、恐いけれど、無性にしたわしい、そんな感じを先生に対して、生徒達は持つていたよう

だ。

先生のお部屋は、いま、吉水学園の食堂になっているが、西側の窓にレンガ塀がせまり、南北ともに塞がった、とても暗いお部屋であつた。私が入学した頃は、もう先生の晩年だつたので、お部屋に籠つておられる時が多く、暗いお部屋からは、たえずお念仏が聞えていた。

手におえないヤンチャであつた私は、よく廊下を足音高く走つたものだが、その時必ず

「今走つたのは誰？」

「ハイッ、私です」

「私では判りません。名前は？」

「遠山です」

「静かにお歩きなさい」

何度か叱られたが、あまりの度々に、業を煮やされたのか、ある時

「チョットお入りなさい」

ときた。友達が教室で待つてゐるのに仕方がない。恐る恐る

入ると、静座しておられた先生は

「あなたは、やがて人を仕込んで行く、立場に立たれる方です。常に模範となる立居振舞をなさらねばなりません。軽卒な態度はお慎しみなさい。判りましたか？」

「ハイ」

「たびたび、ご注意しているのに、忘れて走られる事と思うと、よほどお急ぎなのでしょう。いってよろしい。今度から呼び止められて、時間を空費なさらぬよう、初めから静かに、お歩きなさい」

最後の一言に恐縮し、お辞儀をしてひきさがる、私の背では、常と変らぬ静かな、お念仏が続けられていた。

また、原因が何であったか覚えていないが、ある時、先生のお部屋によばれた。小デシマリと坐っておられた先生から「人間は感情の動物、好き嫌いの出来るのは仕方ありません。しかし、嫌らわれる者にとっては、つらいものです。可哀相じゃありませんか、誰にもいい所と悪い所はあるものです。いい所を見附けて、愛情をかけるようになさらぬといけません。食物でも、好きなものばかり、いただいていると、栄養が偏って、病気の原因を作ります。それと同じで、好きな人とはかり交際していると、視野が狭くなつて、失敗する事があります。感情に走らずいつも理性的な

考えが出来るよう、円満な人格を作るよう、お心掛けなさい。それには、お念仏が一番よろしい。阿弥陀様は、必ずあなたに、正しい智慧を授けて下さいますよ。初めは足が痛いでしょうし、退屈でしょうが、一生懸命辛抱してお念仏なさい」

このお言葉は、年を加え人生経験を積むに従って、千鈞の重味をまし、身にしみて有難く思い出されるのである。

それにしても、こんなに良く指導していただき乍ら、今だに「生れたまま」少しも向上していない私を、極楽から師（日野西徳宝）と共に、溜息まじりに、みつめておられるのでないかと、申訳なく思う此頃である。

木原先生は、つねづね、死ぬ時は誰もいない所で、心静かに息を引き取りたい。お葬式もお祭り騒ぎにならぬよう、ごく内輪でソツと見送るようと、いっておられたそうだが、昭和十七年八月十三日夜十時、七十五歳で大往生を遂げられた。死因は老衰である。お盆中なので、先生の訓育をうけ、お徳を慕う卒業生も、ほとんど列席できず残念だったが、先生のお望み通り、ご密葬はごく僅かな人がお参りしたただけであった。

ご臨終の日の朝食後、先生はお給仕の尼僧に「もうこれでお食事はいらなから、食器は片付けてしま

って下さい。もう今日は往くよ」

といわれ、死期が刻々と迫っても、なお正念にしてお念仏を称えられ、また

今日こそはわが往かん日の来るらし

西のみ空に來迎の雲

というお歌を、口ずさんでおられたという。



南無阿弥陀仏と稱えられる人

藤田 得三

(埼玉県鴻巣市勝願寺中)

私の回りに人がいる。すぐ近くにいる人、遠くにいる人、皆どのように私を見ているのだろうか。好意を持ってか、憎しみを持ってかまた無関心にだろうか。「人の心はさまざまにして、ただ一すじに、夢まぼろしの浮き世ばかりの楽み栄えを求めて、すべて後の世をも知らぬ人も候。」(御消息)と毎日を一喜一憂のうちに過ごしている。

このような人々とともに生活している一老婦人がいる。家

先生と私のご縁は、時間的にいうなれば僅かな日数であったのに、深い感銘が、今なお鮮やかに残っている。三十三回忌のご正當を、前にして思い出を、綴らせていただけるのは、何と不思議なご縁だろう。師恩に感謝を捧げずにはおられない。合掌。

は老夫婦・息子夫婦とその子三人という家で商業を営んでいる。後進の者の為に生活の範を示していた或る日の話によると、老婦人は東北の出身で早く両親に死別し、親戚の世話になって小学校へ進んだが、小学校も途中で当地方へ奉公にでていたところ、縁あって今の夫と一緒にになった。(その為漢字は読めないのだと云っていた)胸をときめかせて嫁いでみると、夫の家は借金だらけでがっかりしてしまったが、両親

を知らぬ老婦人にとって夫の両親がいたことは、大きな喜びであり、楽みであったと有難く思ったそうである。しかし、何とかして實際切りつめるものは食べ物より他になかったの、食べ物と切りつめた由——借金を払い終つてほつとし、家族皆で楽しくと思つた時今度は、その両親に相ついでになられたのには常にこの世は苦婆婆、私をためしているのだと受けとつていた心を破られたと語つていた。その時お念仏を称えることが一番良いことだと聞いて以来、御本尊様・御先祖様は当然であるが、どんな神社でも小さな路傍の小祠までをも、すべてお念仏を称えて拜むようになってしまったという。今では子や孫までその感化を自然に受け、店に来る人にも薦めている。婦人の日常は「お蔭さま」と「お互いさま」の連発ではあるが、潔癖と頑固さで時には誤解し時には誤解される。先日家の嫁は云うことを聞かないので困つたと云うので、何げなく嫁さんに聞いて見ると、互に誤解していたのだった。酸いも甘いも味い尽したような老人でも、悩みや苦しみは尽きぬとは、成るほど人間とはよくよく業の深いものだと感じさせられた。回りの人達から尊敬されている婦人の口癖の一つの苦婆婆とは自分達でつくっているのかも知れない。先ほどの婦人と嫁との誤解も、善意の行き違いより起つたことだったのだから、二人の間で苦婆婆をつくつた

と見るよりほか考えられないのである。全く人の心さまざまである。今では教え教えられる立場で老婦人の感化を受けながら嫁はその分に応じて家業に家事に勤めている。

又或る日の話に、一心に念仏を称えて祈つていたら仏様が婦人に教えて呉れたと次のように話してくれた。と云うのは、一心にお念仏を称え仏様を拜んでいた時、急に辺りにもやのようなものがかり、隣りにいるはずの息子が見えず、（と云うのは、息子が商売上車の運転をするので事故なきやうと二人で拜みにきたのであった。）おかしい事もあるものだと思つてみると、そのもやが少しずつ晴れ帯のようなものが見えその上を何か動いているものがあつた。おかしい事と又思つてみると、それは道路で車が往來しているのだ。とその時オートバイが猛烈なスピードで走つてきて、危いと思う間もなく反対側から來た車と衝突してしまつた。不思議な事と思つてみると又もやがかかつて何もかもぼうつとして見えるのは隣に立っている息子だけになつてしまつた。息子に何か今見えなかつたか尋ねてみたが、何も見えないと云うので、安心して、息子は大丈夫なんだなでは事故を起きぬように今一度とお念仏を称え祈ると又、同じ様子が現れて來たのには驚いた。何と今日は変なことがあるものだと、帰途につき、車の中で先ほどのことを話し、事故は自分がどんなに注意し

でも向うからやってくることもあり、その場合はさげようもないが、注意しても注意しすぎることはないから十分注意してくれよと話しながら帰って来てその日は何事もなく寝に就いた。翌日、町はずれの余り行かない親戚を久し振りに訪ねてみると、開けはなしのガラス戸の中には誰も居ない。なんと不用心なことと思つて親戚の隣りの人に聞いてみると、今朝その家の子が事故を起し入院したので、家族がすべて病院へ行っているとの話に驚き、すぐ病院へとんで行つた。病院へかけつけてみると、親戚の子供が、オートバイでスピードの出し過ぎ事故を起し重傷だとのことだった。それを聞いて、はつとして昨日の不思議なことはこの事だったのかと、その事を教えてくれたのかと思つたそうであつた。又今住んでいる家を借りる時にも、良い水のある家だから移つた方がよいと教えてもらった。その上移るに際しての話し合いもほとんど拍子に進んで有難く思つているのだと話し、商も順調にのびているそうだ。それ故他人様にも薦めていたのだが、

ただ南無阿弥陀仏と祈つたからと、いつもそう教えて下さる訳でもない笑つて云つていた。「百四十五箇条問答」にも問 現世をいのり候に、しるしの候はぬ人はいかに候ぞ。答 現世をいのるに、しるしなしと申事、仏の御そらごとには候はず、わが心の説のごとくせぬによりて、しるしなき事は候也。さればよくするにはみなしるしは候也。観音を念ずるにも、一心にすればしるし候。もし一心なればしるし候はず。むかしの縁あつき人は、定業するなお転ず、むかしもいまも縁あつき人は、ちりばかりものくるしみにだにもしるしなしと申候也。仏をうらみおぼしめすべからず。……心をいたし、ま事をはげむ事、……しるしなくば、わが心をはづべし。

とみえているそのままを行つていたのだ。南無阿弥陀仏と食事をかみ、南無阿弥陀仏とのみ入る人間の、(短かき一生ではあるが、)その命の輝きは何と尊いものだろうと考えざるを得なかつた。

特集 私のすきな念仏者



法然上人靈場めぐり Ⅱ 第八回 Ⅱ

村上博了

十二番札所

伊勢外宮前

欣浄寺

欣浄寺は現在伊勢市一之木二丁目にあり、御詠歌が二首ある。一は「やわらぐる 神の光りの影みちて 秋にかわらぬ短夜のつき」次に「往生は 世にやすけれど 皆人の まことの心なくてこそせね」という。前者は心をやすめる神の光りの影みちて有難さに秋の長夜も、つかの間である。つき

は月影で如来の大光明を指して、神の光と一体とする。後者は往生は易いと云うても至誠心から扶け玉え南無阿弥陀仏と申さないと往生はできないとする、いずれもお念仏の有難さをたたえている。浄土宗お念仏を心から欣ぶ寺に適わしい御詠歌である。

上人は承安五年春四十三歳、二十八カ年に及ぶ一切経研究の成果、観經の一向専念の文に注目、如来本願大聖釈尊出世の本旨、この専修念仏にありと浄土宗を開立された。八万四千と云われる大藏經文も只この念仏一行に帰することを、国民の宗家である伊勢神宮は、何んと思召されるやと、神宮に七日間参籠、一心に専修念仏を供養されたのである。

成満の七日早朝旭日を仰ぐと、大日輪の中に金字で六字の名号が現われた。上人は専修念仏が神宮の歡喜される神意に



法然上人伊勢神宮に参籠の際滞在された処

〈知恩院所蔵〉

かなうと感見、その旭日名号を写しとられて、外宮の宝庫に納められたのである。外宮は豊受大神宮で農業の元締神さまである。人類生活の基盤は食糧にある。その食物のように安心立命のためには、お念仏でなければならぬことを意味する。其後戦禍のため宝庫炎上時、日の丸名号は、火中をとび出し篠（笹）の葉にかかって無事であった。これから「ささの葉名号」と名付けられたのである。神仏混淆からは「本迹不二の名号」とも云われた。専修念仏は伊勢神宮も能受されたわけである。（国鉄、近鉄も伊勢市駅下車が便）

第十三番札所

京都東山清水寺奥院

阿弥陀堂

第十三番霊場札所は京都市東山区清水寺奥院阿弥陀堂である。音羽の滝の上に位置するから滝山寺とも云われた、現在重要文化財の五間三間半の堂である。本尊は金色さんぜんとし



法然上人が説法された処

〈知恩院所蔵〉

た丈六阿弥陀如来像であり両脇士は観音勢至の立像である。本尊に向って左側来迎柱に円光大師二十五拝拾三番遺跡、右側には洛陽六阿弥陀如来念仏道場と金文字で、黒塗一丈幅一尺ほどの掛札に光りかがやいて立派である。

文治五年五月十五日、若葉かおるさわ風の中で、清水寺大勧進の沙弥印藏は、法然上人（五十六歳）を請じ、不断常行念仏会を修行し今に退転なく常行念仏と云われる。

後柏原天皇は、日本最初常行念仏道場のたて額を下賜された。

一説には印藏は建久元年秋、阿弥陀堂を建立し丈六阿弥陀如来を安置、上人を請じ開眼供養会を修し、常行念仏を始めて修行したとも伝えられる。上人常行念仏の有難い日本最初の霊場である。

御詠歌は

あみだ仏と 十声となへて まどろまん
ながきねむりと なりもこそすれ

と、又は

清水の 滝へまいらば おのづから

現世あんのん 後生安楽

と云う二首がある。前者はいっお迎えがあつても、お念仏により救われることを物語る。人あり夜床で仲々に眠れない折には、この上人の和歌を十回繰返すと安眠出来ると巷間伝え



処法の上人で荘山の九条兼実の依歸した上人に然法

＜知恩院所藏＞

られる有難いお念仏の功德は正に広大無辺である。後者は東山清水の音羽の滝に結縁すれば、阿弥陀堂の念仏の功德でめでたく往生出来るとする、共に念仏の功德をたたいる。

（市電、バス共東山松原又は五条坊下車）

第十四番札所

京都小松谷

御坊正林寺

小松谷御坊正林寺は、京都東山区渋谷通り東大路東入三丁目上馬町にある。通称勅修御伝四十八巻中隨所に小松殿として見られる霊場で、かつては現位置の西南部にあった。

洛東華頂義山上人弟子恵空は、小松谷御坊復興を免願、正徳年中兼実公末流九条内大臣植基公から河原御殿をいただき移建、大師堂、大方丈、庫裡とし、ついで阿弥陀堂、山門、鐘樓堂等を建立し七堂伽藍を整備したのである。

小松殿とは内大臣平重盛公の別邸のことであった。重盛は

大経四十八願に擬して、ここに四十八灯を供養し念仏行道したと伝えられる。平家滅亡後関白兼実公の山荘となり、上人は請ぜられては教化された。兼実は一室を造り上人の休息所とされている。建仁二年（一一〇二）正月二十七日、兼実公は上人に従って剃髪円証と号された。又元久二年（一一〇五）八月上人が「ぎやく」おこりを患らわれた所でもある。上人は大変なやまれて「千歳ふる 小松のもとを 住家にて 無量寿仏の迎いをぞ待つ」と歌われた。四国迁座時は、ここで

「いきがい」

最近「いきがい」という言葉をよく耳にします。世の人々は、何かに「いきがい」を求め、何か熱中できるものを求めています。ある人のいきがいは仕事であり、またある人の場合は家庭にそれを求めています。

それぞれ、仕事に、家庭に熱中されることは大変よいことにはちがいがありません。しかし、ものごとには「ほどほど」ということがあつて、他の一切を犠牲にしてまで、一つのことに夢中になってしまうのは、どうでしょうか。

モータリ社員は結構ですが、家庭を顧みないのでは困ります。マイホーム主義もいいんですが、年寄りをいたわり、先祖を大事にまつて、子供に対する生きた情操教育です。

兼実公と別れ、旅立たれている。

大師堂本尊大師像は、上人恩免あり、掃洛時信徒に残された自作御像が、夢告により当堂に迎えられている霊場である。御詠歌は、

千歳ふる 小松のもとを 住家にて

無量寿仏の むかへをぞ待つ

と云う。上人の心境を伝えるお歌で人間味がひしひしと感じられる。

さらに、エコノミツク・アニマルは、その名のとおりに、アニマル動物では人間とは申せません。教育ママゴンも、自分の子供可愛さがうらめにて、子供の自由にすなおに伸びる、人間らしい、暖かい心をむしんでいます。

いきがいを求める、その心に正しい信仰がしっかりと根をはつていけば、そのような心配はいりません。

商売をさせていただけるのも、お客さまあつてのこと、便乗値上げなど、できようはずありません。また、すべての子どもたちが、平和な社会に、明るく、正しく、仲よく、暮せるようにと願うのがほんとうの教育とわかれれば、受験戦争に拍車をかける親にはなれないはずだ。

どうか、もう一度、家族の皆様で、いきがい、ということについて、話し合っていただきたいと思ひます。

求道青年像奉安のすすめ



若き日の法然求道誓願像

原像所在地

京都嵯峨清凉寺

法然房源空二四歳の求道誓願像

林 靈 法

(大本山知恩寺法主)

毎夏、私は女子大の学生をつれて、洛西釈迦堂の法然上人二四歳の誓願像の前に立って来た。今の日本の青年のふがいない姿を見つめて、どうもやるせない思いに追いつめられるとき、私は嵯峨に走った。そして自分の求道の光の薄れて、自分ではどうにもならぬとき、夜であろうと昼であろうと私はいつも釈迦堂の山門をくぐった。

私は求道誓願像をじっと見つめたまま、いつまでも動かない。あの瞑目した胸中には、どのような苦悶が渦まいていることだろう。

俗凡夫としての我が疾風怒濤の迷いの姿、そして自分の歩む大地には、人間の憎しみと殺し合いの乱世の相貌がいよいよよくひろげられていく。背負いきれぬ人間の悲しみ、世の

苦しみにぐつと堪えて、ひたすらに一道の光を求めて立つ法然房源空二四歳の求道誓願像である。

私たちはいま日本のきびしい現実の中に立たされている。この現実を乗りこえる心の支えとして二四歳の求道誓願像を受けとりたい。しっかりと合掌のうちに瞑目するその姿勢の中に、私は人間の生きることの悲しみをうちに深くたくわえつつも、やがて憎しみと悲しみを遠くこえて、大きく一道の光を求めつづけている。真生復活のよろこびをうけるのである。二四歳の求道誓願像——この像をみつめることは、日本人にとって生きる力である。真人生の道標である。

・法然上人24歳求道青年像

Aタイプ高さ24cm・重量1kg

(特殊合金製) 限定品

1体 12,000円

Bタイプ高さ37cm・重量6kg

(ブロンズ製) 限定品

1体 88,000円

・企画発行

求道青年法然房源空

顕彰会

・謹製

三井金属工業株式会社

・お申込み先

求道青年法然房源空

顕彰会

京都市右京区嵯峨野宮ノ

元町76 阿弥陀寺内

TEL(075)881-2316

振替京都28797

浄土宗宗務庁

京都市東山区林下町400

総本山知恩院内

TEL(075)541-7131



仏説無量寿經 卷下（二）

村瀬 秀雄

一 乃至一念にて往生す

十方恒沙諸仏如来皆共讚二歎無量寿

仏威神功德不可思議一。諸有衆生聞二

其名号一、信心歡喜乃至一念、至心

廻向願レ生二彼国一、即得二往生二住二

不退転一。唯除三五逆誹二謗正法一。

十方恒沙の諸仏如来は、皆ともに無量寿仏の威神功德の不

可思議なることを讃歎したもう。あらゆる衆生は、その名号を聞いて信心歡喜して乃至一念し、至心に廻向してかの国に生ぜんことを願わば、即ち往生を得て不退転に住す。ただ五逆と正法を誹謗するものを除く。

（意訳）

十方世界にまします無数の仏たちは、無量寿仏が具えている威厳と恵みがとうてい考え及ばない程に勝れていることを、皆一様にほめたたえている。そこで人々は諸仏から賞讃されている無量寿仏の名号を聞いて、信心を起し歡喜を生じ、平素から念仏を相續し、臨終の最後の念仏にいたるまで、眞実の心をもって廻向し、極楽浄土に往生したいと願う

ならば、その人々は必ず往生することができて、再びもとにもどることがない。ただし親殺し等の五逆罪を犯したり、仏の教法を誹謗しようとする者は往生することができない。

二 上輩の往生

十方世界諸天人民其有^二至心^一願^レ生^二彼国^一、凡有^二三輩^一。其上輩者捨^レ家棄^レ欲而作^二沙門^一、發^二菩提心^一一向專念^二無量寿仏^一、修^二諸功德^一願^レ生^二彼国^一。此等衆生臨^二寿終時^一、無量寿仏与^二諸大衆^一現^二其人前^一。即随^二彼仏^一往^二生其国^一、便於^二七宝華中^一自然化生住^二不退転^一。智慧勇猛神通自在。是故阿難、其有^二衆生^一欲^レ下^二於^二今世^一見^二中無量寿仏^一、応^レ下^二發^二無上菩提之心^一修^二行功德^一願^レ上^二生^二彼国^一。

十方世界の諸天人民の、それ至心があつてかの国に生ぜんと願うものに、凡そ三輩がある。その上輩の者とは家を捨て欲をすてて沙門となり、菩提心をおこして一向に専ら無量寿仏を念じ、もろもろの功德を修してかの国に生ぜんことを願う。これらの衆生の寿終の時に臨んで、無量寿仏はもろもろの大衆とともにその人の前に現じたもう。即ちかの仏に随つてその国に往生し、すなわち七宝華の中において自然に化生し不退転に住す。智慧、勇猛、神通は自在なり。この故に阿難、それ衆生があつて今世において無量寿仏を見奉らんと欲せば、まさに無上菩提の心をおこし、功德を修行し、かの国に生ぜんと願うべし。

(意訳)

十方世界の人々の中で、眞実の心をもつて深く信じ、極樂浄土に往生したいと願う者には、凡そ上輩中輩下輩の三種類のものがある。そのうちの上輩の人というのは家を捨て欲をすてて出家し、仏道修行者となつて極樂浄土に往生したいと願う心をおこし、ひたすらに専心に念仏を唱え、多くの功德のある修行を積み、それによつて極樂浄土に往生したいと願う人のことである。このような人々の臨終の時には無量寿仏が多くの菩薩をお従えになつて来迎せられ、その人の目の前にお現われになる。そしてこの人々は無量寿仏の後にしたが

って極楽浄土に往生し、七宝の蓮華の中に忽然として生れかわり、再びそこから退くことがない。やがてその人々は智慧も勇猛心も靈妙な能力も自由自在に得ることが出来る。このようなわけであるから、阿難よ、もし人が臨終に際して無量寿仏のご来迎にあずかりたいと願うならば、まさしく極楽浄土に往生したいと願う心をおこし、念仏その他の修行を積んで往生することを願わなくてはならない。

三 中輩の往生

其中輩者十方世界諸天人民其有三至心

願レ生ニ彼国一、雖レ不能下行作ニ沙門一

大修中功德上、当下発ニ無上菩提之心一

向專念中無量寿仏上。多少修レ善奉ニ持齊

戒一起ニ立塔像一飯ニ食沙門一懸レ繒然レ燈

散レ華焼レ香、以レ之廻向願レ生ニ彼国一。

其人臨レ終無量寿仏化ニ現其身一、光明相

好具如ニ真仏一与ニ諸大衆一現ニ其人前一。

即随ニ化仏一往ニ生其国一住ニ不退転一。功

德智慧次如ニ上輩者一也。

その中輩の者とは十方世界の諸天人民の、それ至心があつて彼の国に生ぜんことを願い、行じて沙門となり大いに功德を修することは能わずといえども、まさに無上菩提の心をおこし、一向に専ら無量寿仏を念すべし。多少に善を修し、斎戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、かとりをかけ、としびをともし、華を散じ、香をたき、これを以て廻向してかの国に生ぜんと願わば、その人の終りに臨んで無量寿仏はその身を化現したまい、光明と相好はつぶさに真仏のごとくにして、もろもろの大衆とともに、その人の前に現じたまう。即ち化仏に随つてその国に往生し、不退転に住す。

(意訳)

次に中輩の人というのは、十方世界の人々の中で、眞實の心をもつて深く信じ、極楽浄土に往生したいと願う者であるが、しかしながら上輩の人のように出家して仏道修行することができない人であり、大きな功德を積むことができない人のことである。これらの人々は極楽浄土に往生したいと願う心をおこし、ひたすらに専ら念仏を唱えなければならぬ。その上で多少の善根を積み、心身をつつしみ、堂塔を建て仏像をつくり、修行者に食物を供養し、天蓋をかかげ、燈明をささげ、華を散らし、香をたく等する。これらの善行を廻向し

て極楽浄土に往生したいと願うならば、その人の臨終に際して、無量寿仏はその人の器に応じたお姿に身を変えられた上で、多くの菩薩をお従えになって来迎せられ、その人の目の前にお現われになる。無量寿仏は化益のために身を変現されるといっても、お身体から放たれる光明やお姿の特色は真仏と少しも違わず勝れたものである。こうしてその人は仏に從つて極楽浄土に往生し、再びそこから退くことがない。そして功德と智慧とは上輩の人に次いだものが得られる。

四 下輩の往生

其下輩者十方世界諸天人民其有^二至心^一
欲^レ生^二彼国^一、仮使不^レ能^レ作^二諸功德^一
當下^二發^二無上菩提之心^一一向專^レ意乃至十
念念^二無量寿仏一願^レ生^二其国^一。若聞^二
深法^一歡喜信樂不^レ生^二疑惑^一乃至一念念^二
於彼仏^一以至誠心一願^レ生^二其国^一、此人
臨終夢見^二彼仏^一亦得^二往生^一。功德智慧
次如^二中輩者^一也。

その下輩のものとは十方世界の諸天人民の、それ至心があつて彼の国に生ぜんと欲し、たとえもろもろの功德をなすことと能わずとも、まさに無上菩提の心をおこし、一向に意を専らにして乃至十念し、無量寿仏を念じてその国に生ぜんと願うべし。もし深法を聞いて歡喜信樂し、疑惑を生ぜず、乃至一念してかの仏を念じ、至誠心をもってその国に生ぜんと願わば、その人は臨終に夢のごとくにかの仏を見奉りて、また往生を得る。功德智慧は次いで中輩のものごとし。

(意訳)

次に下輩の人というのは、十方世界の人々の中で、眞實の心をもつて深く信じ、極楽浄土に往生したいと願う者であるが、上輩や中輩の人のようにいろいろの善根を積んで功德を得ることができない人のことである。しかしこの人は極楽浄土に往生したいと願う心をおこして、ひたすらに専心して念仏を相續し、臨終の十念にいたるまで念仏によつて極楽浄土に往生したいと願わなくてはならない。もし念仏往生の教えを聞いたならば歡喜して心から深く信じ、少しの疑惑をもつこととなり、平素から臨終の最後の一声にいたるまで念仏を相續し、眞實の心をもつて極楽浄土に往生したいと願うのである。そうすればその人は臨終に際して夢うつつのように無量寿仏を見奉り、同じく極楽浄土に往生できる。その功德と智

慧は中輩の人に次いだものが得られる。

五 仏の本願力

其仏本願力 聞レ名欲ニ往生ニ皆悉到ニ

彼国ニ自致ニ不退転ニ

その仏の本願の力は、名を聞いて往生せんと欲せば、皆ことごとくかの国に到りて、自ら不退転にいたらん。

(意訳)

無量寿仏の本願の力は、諸仏が賞讃する無量寿仏の名を聞き、極楽浄土に往生したいと願って念仏すれば、その者たちは皆もれなく極楽浄土に往生し、再びもどることのない正定の位につける。

六 謙虚に恭敬せよ

若人無ニ善本ニ 不レ得レ聞ニ此経ニ 清浄

有レ戒者 乃獲レ聞ニ正法ニ 曾更見ニ世

尊ニ 則能信ニ此事ニ 謙敬聞奉行 踊

躍大歡喜 憍慢弊懈怠 難三以信ニ此法ニ

もし人に善本なければ、この経を聞くことを得ず。清浄にして戒をたもてる者は、すなわち正法を聞くことをうる。かつて更に世尊を見奉るものは、すなわちよくこの事を信ず。謙敬して聞き奉行し、踊躍して大いに歡喜す。憍慢と弊と懈怠とは、以てこの法を信じ難し。

(意訳)

もし前世において善根功徳を積まなかつた人があれば、その人はこの世でこの経法を聞くことができない。前世において清浄な修行をつみ、戒を保っていた者だけがこの世において正法を聞くことができるのである。更にまた前世において諸仏にあうことができたものは、この世において無量寿仏の本願を信ずることができる。こうしたわけであるからまず謙虚に反省し、自分は凡夫にすぎないことを信じ、仏の本願を恭敬に仰いで信じ、仏の名号を聞いて念仏を唱えるのである。そうすればその人はこの上のない歡びが得られる。その反対に高慢でおごりたかぶっているもの、心を閉して教法を聞かずに教えに反することをするもの、怠けて修行をおこたるものたちは無量寿仏の本願を信ずることは困難である。



念佛ひじり三國志

(五)

―法然とゆぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

「阿弥陀仏の御名を唱えるだけで」

「余は要らぬかな」

「要りませぬ」

遊蓮房円照が西山広谷で開眼した善導大師の観經疏の言葉そのままを法然はつたえてくる。

一刻(二時間)にも満たない対話であった。しかし円照は完全に魅せられてしまった。

ふくよかな表情。ものやさしい態度物腰だ。だが、語る言

「阿弥陀仏は、かの浄土にましまして、わたしらすべてを救うと誓われていらっしゃる。わたしらは、このお誓いに、ただすがってゆけばよろしいのです」

法然房源空の言葉には、一点の淀みもなかった。

「どうやって、おすがりするのかな」



法然



前号のあらすじ

俊乗坊重源は太福長者邦綱に執拗に食ひ下がる。その上過去の罪障を償うために出家入道をすすめ、授戒師として法然房源空の名をまたしても持ち出す。明遍は重源の発言に驚いたものの源空というその人にますます興味をひかれる。そして久し振りに西山広谷に兄の是憲を訪れる。谷合いの庵に住む是憲こそ遊蓮房円照は多少健康に不安を感じさせたが、しかし今では唐の善導大師の『観経疏』に触れ阿弥陀仏の慈悲にすがる身となっていた。そして「黒谷の法然」と聞いて非常に心を動かした。

遊蓮房はその法然をこの眼で確認しなかった。ある日、京へ下り、中納言頼時の子行隆を油小路の葉室邸に訪れた。それは行隆の子が黒谷の叡空上人の室に法然の徒弟として出家していたからであった。法蓮房信空という若き僧である。行隆は浪々の身であり、日々の衣食にも窮していたが、この久しき旧知を黒谷へと案内した。そしてついに遊蓮房は法然房源空に相まみえることになる。

葉の一つ一つが奥深い。鋭く胸をついてくる。

これは、この法然自身が必死になって求道して、掴み取ったものだからであろう。空疏な言葉の遊戯ではない。

「仏の慈悲を信じることが、真に人間を呪縛の世界から解放することにもなります」とも、言った。

呪い、祟り……これまでの仏法が忌み恐れ、かつ民衆を恫喝してきた思想上の武器を、法然はかなぐり捨てて。阿弥陀の大慈大悲を信じることこそ人間解放だと主張する。全く同感である。

遊蓮房円照は、さわやかな比叡山の朝を体験した。

昨夜深更まで法然房や信空と念仏し、ぐっすりと眠ったのだ。

朝の陽光が若葉に美しい輝きを与えている。鳥の声もすがすがしかった。つい先ごろ黒谷へやってきた春が、今いっばいに手をひろげて、全山をおおいかけようとしているのだ。

「あなたがいる西山広谷の別所へも一度いつてみたい」

別れぎわに法然は言った。

「お待ちしている。それこそ御房のようなお方と、昨夜みたいに声をそろえてお念仏できる毎日が持てたら、円照の幸福はそれに尽きるであろう」

法然が現実には黒谷を去って、円照がいる西山広谷に住むのは四年後のことになる。

自分だけはわかつている。しかし自分には、このわかつていることを、他人につたえることができない。説得しきれない。

その点を法然は正確に、一点のためらいもなく語ってくれた。

遊蓮房円照は胸の感動を抱きしめながら、山道を京の街へ下っていった。

この感動を、かき乱すのが同行する葉室行隆の猥雑な言葉である。しきりに語りかけてくるのだ。

「あの黒谷の別所にはな、父の頭時が莫大な資を投じている」

「……」

「あの経蔵も父がこしらえたものだ。あの房舎も。また近江にある数町歩の田地まで添えて、沙弥たちが生活できる基礎を作ってやった」

「それが、どうした？」

むっとした表情で円照はにらみかえした。行隆は卑屈な笑みを浮べた。

「その大壇那が喰うや喰わず。黒谷の坊主どもはぬくぬくと生きておる。のん気に念仏なぞ唱えてな。理に合わぬ話ではないか」

「さもないことを考えるでない」

「しかし腹が減っては、人間どんなことでも考える」

此奴には勝てぬ。と円照は思った。仏法も念仏もない。た

だ飯が食いたい。酒が飲みたいのである。

「あの経蔵を、どこかの長者にでも売って、その金を此方へまわしてもらおうか」

そんな胸算用ばかりしている。

河原町まで降りてくると、その一角に朝市が立っていた。

春菜を並べる百姓たち。遠く若狭の海でとれた魚を塩にして売る商人もいる。買いたる町の女や邸の雑仕たち。

「米が欲しいな」

行隆は貪慾な眼で円照を見た。

「これで買ってくるといい」

何がしかの銅銭を握らせて、市の雑沓へ駆けこんでゆく行隆のうしろ姿を眺めて、円照は苦笑を結んだ。

何のかのとしやべりながら、足を朝市の方へ向けてきたのも、こんな魂胆があつたのことだったか。

しかし円照は、じきに眼をある一点にそそいでいた。七、八人の男女が人垣を作っている。輪の中からは何やら妙なる楽器の響きが流れ出てくる。琵琶の音だった。

円照は人垣に歩み寄った。

盲しいの法師が歌っている。まだ若い。二十歳そこそこの

肌白い青年だった。

弥勒菩薩はあわれなり

天人大会の前にして

昔の仏の有様を

文殊に問いつつ説いたまう

ただの琵琶歌とも思われなかった。

米袋をかついで戻った行隆に訊いてみた。

「近ごろ、町の事情には全くうとい。あの琵琶法師は？」

「おお、あれか。法文歌をうたっているのじゃよ」

「法文歌——」

「今様でな。法皇がしきりに唱導されておるらしい」

後白河法皇の「今様狂い」は近ごろに始まったことではない。円照の父信西が身の危険を感じて、必死に後白河の所在を探がしまわったあの平治の乱。上皇は夜を徹しての今様遊びで行方をくらましていたのである。

「あの琵琶法師、ただの流れ者とも思えない」

「うむ。院に出入りする者かも知れぬな。法皇は美声とあれば、誰彼の差別なくおそはへ近づける」

〈琵琶法師〉



再び耳をすまして円照は、琵琶法師の歌に聞き入った。

世の中は まんご末代

承安なんぞと 年号あらた

一乗実相 珠清し

弥勒の船が 着いたれば

弥勒の年と 称すべし

盲目青年の美声は、朝市のざわめきのなかにひとときわ冴えて響くのであった。

「はてな」

円照はいま歌われた歌詞が、心にひっかかった。容易ならざる歌詞のように思われたからである。



葉室行隆とは、朝市で別れた。西山へ帰ってゆくふうをよそおい、しかし遊蓮房円照は再び盲目の琵琶法師の前へ舞い戻っていた。

さらに二首、三首と歌った若者は、やがて琵琶を小脇にし

て立ち去ろうとする。人垣が散っていった。

「先刻の歌じゃが……」

二人きりになると、円照は若者に声をかけた。

「あなたは？」

「うむ。旅の僧じゃ。ちと解せない文句を聞いた。何やら今年からあらたまった承安の年号を否定しておるみたいだな」

「そのとおりでございます」

盲目の青年はきっぱりと言った。

「弥勒の船が着いたれば、弥勒の年と称すべし、とはどういうことだ」

「まんど末代。世の中が間違っているのでございます」

「どう間違っているのかな」

「主上を主上とも思わぬ人間が天下の政事をやっているからです」

「それは——」

「大相国です」

「……」

円照は思わず、あたりへ眼をくばった。二人は朝市から、だいぶ離れた地点を歩いてた。道の前後に人影はなかった。いまどき、露骨に大相国清盛入道の名前を口にして批判め

いたことを言ったら、どんな結果を招くか。世捨て人の円照にもそれくらいは常識はある。

だが盲目の若者は恐れげもなく清盛を罵りはしめるのだ。

「去年十月のことでございます」

と、ひとつの事件について語りはじめた。

去年十月、嘉応二年十月十六日のことであるが、清盛の孫にあたる資盛が、鷹狩の帰り路上で摂政松殿基房の行列と出会った。十三歳の資盛は下馬の礼を取らなかつた。怒った松殿の侍者たちが少年を馬から引きずりおろして、侮辱を加えた。

これを聞いて清盛は怒った。松殿基房の参内をねらって、兵三百騎を駆け入らせ、さんざんに摂政を凌辱した。

この参内は高倉天皇の「御元服定め」のときだ。摂政の基房が入内できぬため、御元服定め——御元服に関する評定はついに延期となったのである。

「そればかりではござりませぬ、大相国は関白基実公が亡くなるや、その所領を横領し、弟であつた松殿基房公には殊んど知行を与えぬ横暴ぶりでございます」

「あなたは眼が不自由だから、平気でそんなことをしゃべっているが、もしもわしが平家一門に関係のある者だったらど

うするのか。身を八つ裂きにされてしまふぞ」

「かまいませんぬ。そんな非道が横行する世の中、平氏を打倒するためなら、命が惜しいとも思いませんぬ」

若者の全身は義憤で燃え立っている。その炎が円照にもじかに感ぜられた。

「幸いわしは平氏とは関係がない世捨て人じゃ。それにしてもお上が制定した年号を呼ばず、弥勒の年なぞと、おだやかな話ではないな」

「そうでしょうか」

「そこには、政府転覆の匂いがある。さきほど歌っていたあの今様じゃが、歌は誰が作った？」

「それは明かすわけにはまいりませぬ」

「今様がお好きな後白河院のことじゃ。そのあたりから出たことじゃな」

盲目の若者は微笑を浮べただけで、答えなかった。

弥勒私年号という。

弥勒菩薩は釈迦の弟子中でも抜群の天才児だった。釈迦も彼の才能、さわやかな人格を限りなく愛した。だが弥勒は釈迦に先立って夭折した。

彼は必ず復活する。新しい仏陀として末世に出現して、人

間を救う、と信ぜられた。

これが弥勒思想であった。

弥勒が兜率天浄土へ往生を求める上生信仰と、兜率天浄土に長期滞在したあと、この末法の社会へ復活して現れるという下生信仰の二つが信ぜられた。ことに後者は民衆のあいだに深い根を持った。仏教のなかでは数少ないメシア思想（救済思想）の一つである。

日本の思想史のなかで、この弥勒メシア思想は独特の形態を持った。弥勒私年号である。

為制者が定めた年号を無視して「弥勒の年」と民衆は呼んだ。

歴史のなかで最初に弥勒私年号が登場したのは承元元年であった。嘉応から承元と年号は改まったが、民衆は納得しなかった。弥勒第一年と呼んで、官制の年号をきびしく否定した。ゆがんだ政道が正しい方向へ戻ることを、ねがったのである。

ちなみにこの弥勒私年号は戦国時代へはいつて関東の農民たちの間で強く支持された。永正三年（一五〇六）から五年まで。そのあと天文九年（一五四〇）から十一年までが、歴然とした弥勒の年となった。甲斐や常陸の寺院にある過去帳

は、はっきりとそれを明記している。

永正三年は弥勒之丙寅だし、翌永正四年は弥勒四年丁卯なのである。

とにかくこの弥勒私年号が、発祥を承安元年に求めたことは暗示的だ。その五年後の承安五年春は、法然房源空が比叡山黒谷をくだった年にあたるからである。現代の末学たちはこの年を朴して、浄土宗開宗の年としている。

話を遊蓮房円照へ房そう。

円照は若い盲人をその住居にまで送ってやることになった。いや、語り合いながら市大路を進むと、若者は長い築土の前で、足を停めた。

「私は此処に住んでいるのです」

「たしか此処は西洞院姉小路……」

円照は腰を抜かさんばかりにおどろいた。

何たることぞ。この邸は、昔と結構模様は一変していたが、父信西の邸跡ではないか。円照自身はここで育った。

「この邸、おぬしのか」

「いや、この主人、西光法師さまに養われているのでございます」

「西光法師——」

円照は記憶を招き寄せなければならない。

北面の武士で、父信西に寵愛された左衛門尉師光。彼は信西が田舎の山奥でみずから土中へ身を沈めたとき、父は師光に僧名を与えた。西光である。

「おぬしは、その西光法師の縁者なのかな」

円照は慎重に訊いた。

「ご法師とは直接に関係はございませんぬ。院にお仕えするお局に紀伊の二位とおっしゃる方がいらっしゃいます」

「紀伊ノ二位——」

あのころ、母と呼んだ女人ではないか。

「私が琵琶法師として院に招かれた折、このお方がたいへん私の琵琶を愛してくれましたのでございます。聞けば紀伊ノ二位は西光法師のご主人筋とか。私のことを一切西光法師が面倒をみてくれたのでございます」

何ということだ。西山広谷にこもって十余余。世の中はすべて一変したと信じこんでいたのに。姉小路の一角だけには昔の關係が生き残っていたのである。

「西光法師なら旧知の間柄じゃ。ひと目会いたい。案内してもらおうか」

円照は若い盲人に導かれて、邸内へはいった。

三

左衛門尉師光。いまの名は法師西光。

円照は久々の西光に大歓迎された。昔ながらの主人扱いをする。

西光は主人信西の死後以後、後白河上皇に取り立てられた。順調に出世コースを歩んだ。加賀一国の大守となった。

ただし現在はこの地位を長男師高にゆずって出家した。次男の師経、三男の師平。いずれも北面の武士として羽振りをきかせていた。

「あなたのことは、今でも法皇がよくお噂されていますよ」と、西光はお世辞を並べた。

智勇兼備の信濃守是憲が側近にいてくれさえしたら、大相国の専横は必ずおさえてくれるはずだ。とつねづね法皇は洩らしているという。

「いや、いや、みんな捨ててしまった。いまのわたしには何の関係もない話ばかりじゃ」

円照はこれのお世辞を退けたが、やはり胸の血は湧いた。政治の世界には、男の気性をゆさぶる魅惑があった。

そんな円照の心底を見すかすように、西光は平氏の横暴を

言いつのつた。

「だいたい大相国なぞと称して、太政大臣にまで成りあがった清盛入道とは、そも何者であるか。刑部卿忠盛の養子ということになっているが、どこの馬の骨かわかったものではない。近ごろでは後白河法皇の落胤だったとさえ掲言している。これはひそかに帝位をうかがう下心によるものではない。清盛は十五、六になっても宮廷へ出仕できず故中御門の藤中納言家成卿の雑仕だった男ではござらぬか。高平太と呼ばれた下司下郎です。それが父忠盛卿が海賊を召し捕った褒賞で殿上へ昇ることになって以来、何となく恰好がついてきた。清盛の出世も一から十まであなたの父上、信西さまのお引き立てだった。それを平治の乱にはまんまと裏切って……信濃さま、おぼえておいででしょう。あの折の父上が無念なるかたなきお姿で自害なされたことを」

忘れるはずがない。

保元の乱以後、後白河、信西、清盛とがっちり構成された政道の枢軸が、なぜかあのとき、父信西だけが脱落を余儀なくされたのだ。

父はこの陰謀の主を、清盛と彼のバックにいる大福長者邦綱だと見とおした。たしかに彼らの小細工もあったであら

う。しかし根源はもっと深いところにあったように思われてならない。

「法皇は、絶対に清盛入道をお許しになりませんぞ。近い将来必ず大相国を異にかけて、焦熱地獄の底で苦惱を全身で味わせるおつもりでいらっしゃる」

西光法師は力説するが、これまでの政治の動乱で、最も頼りにならないのが後白河法皇ご自身ではなかったか。

今更のように円照は、生前の父信西が洩らしていた言葉を思い浮べるのだ。

——東西の歴史に比類なき暗王。

それが後白河法皇であった。

「ところで西光殿」

と、円照は政治の毒気をそらすためにも話題を他へ転じた。さっき此処へ案内してくれた盲目の若者の出自身分を問うた。

「實時のことでござるか。彼は決して卑しい者ではありませんね。綾小路の一門で、ただし生来の盲人。あの生い立ちでさえなければ五位、四位にもなっている者。ただあの美声はたぐい稀れで」

「うむ。さきほどわしも朝市で聞き惚れた」

「琵琶歌を」

「さよう。しかしあの歌の文句はおだやかでない。承元の年を弥勒の年などと称して」

「そのことだが、法皇はむしろあの歌を清盛入道に聞かせたいと願っている」

「やはり法皇から出た歌だったか」

「法皇は、あなたもご存知のとおり、昔から今様好きでいらっしゃる。毎夜好き者を集めて、沢山の歌をお作りになる。近ごろは作歌の傾向が一点に絞られてきた。それは一意平氏打倒」

「それを清盛に聞かせて、どういうことになるのかな」

「清盛は必ず怒って、院に何らかの断圧を加えてくる。それがねらいで。そんな非道が行われれば必ず義憤の士が立ちあがる。法皇のねらいはそこでござる」

そんな甘っちょろいことで、と円照は笑いとばしたかった。別の私案が思い浮ばぬでもない。だがそんな口出しをすることは、再び政界の泥沼へ足を突っこむ愚を意味する。

円照は座を立った。

西光法師はすがりつくような眼で追ってきた。

「信濃さま。ひじりになられて、何かとご不自由でございましょう。この西光にできることなら、何なりとお命じ下さい」

おのれ自身も僧形の身でありながら、世捨て人に不自由なぞと言うあたり、この西光に限らず、当時の「法師」生活の矛盾が露出してゐるものだ。

「何も要らぬさ」

「しかし、それでも」

ここで円照は、今朝別れた黒谷の法然房のことを思い出した。あのひじりと、起居を共にして、念仏生活を働んだら、どんなにか幸福であろうか。それにはやはり財政的な基盤が必要になってくる。

「そうじゃな。所望したいことが一つある」

「何なりとご遠慮なく」

「わしが今住んでいる西山広谷の房は、建物も古くて手狭い。それと、特定の檀那もおらぬゆえ毎日の食事にもこと欠く有様だ」

「お安い御用で。新しい房舎を建て、それにいささかの知行を付けるだけでよろしいのですな」

「さよう。弟子どもをふくめて四、五人の生活じゃ」

「さっそく誰かを西山へやりましょう。それくらいのご援助を致しませぬと、お父上に叱られます。もともとこの邸はあなたご一族のもの。皆さまが遁世されたので、西光が使わせ

てもらつてゐるのです。そのご恩報じにも」

往年の唐国ぶり、信西邸の豪華さは偲ぶべくもなかった。西光は、庭は荒れ放題、建物も雨露をしのぐだけのものだった。いかにも武士らしい無趣味さである。

円照はなつかしげに、旧邸の跡を見つめたあと、西光邸を出た。

門のきわで盲目の若者資時と再び会った。

「紀伊ノ二位殿に是憲から、くれぐれもよろしく伝えてくれ」

「是憲までございますか」

「信濃守是憲だ。それと、おぬしも一度、西山広谷へ訪ねてくるがいい」

「はい」

「琵琶法師もよいが、仏法を伝えるなら、やはり本格的な勉強をしておかねばならぬ。いささかわしが、その手ほどきをして進ぜる」

この盲目の資時は、後に法然の門下にはいった念仏ひじりである。法名を生仏と言った。

生仏が琵琶にのせて吟ずる平家物語は、長くこの国の人々の間にひろがったのである。

千姫の墓

京都 東山

知恩院境内

知恩院に千姫の墓のあることはあまり知られていない。勢至堂の裏、知恩院の歴代の墓地の中で、濡髪さまの前に位置している。その大きい墓石は華麗に組まれている。千姫の法号は天樹院殿榮誉源法松山大姉というが、大殿に安置されてある位牌もすばらしいものである。

千姫は秀忠の娘で、母は浅井長政の娘達姫。慶長八年幼なくして秀吉の息子秀頼に嫁し大坂に行った。ところが元和元年には大坂落城となり、翌年には桑名城の本多忠政の子忠刻と再婚した。寛永三年には忠刻を死んでしまったので、江戸に帰り竹橋にすんでいた。千姫は家康の孫娘で、家康もかなり可愛いがっていたようだ。俗説によると、落城につき千姫を大坂城から救出する際に、

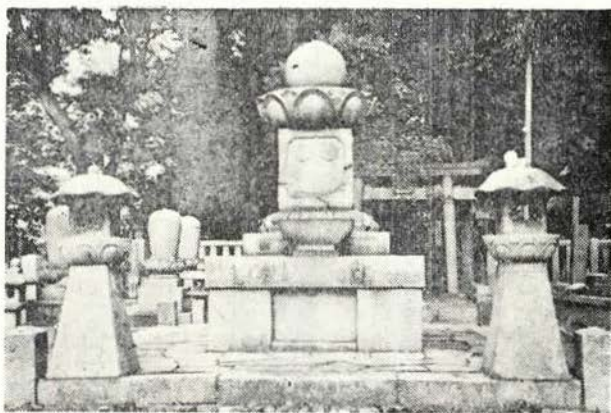
千姫を助け出したものには千姫をやると、家康がいった。それを本気にした坂崎出羽守真盛が効け出した。ところが実際は本多に嫁してしまった。自ら大ケガをして千姫を救い出した坂崎にしてみれば忿懣やるかたないところであろう。強奪にかかったが結局は殺されてしまった。これは事実に近いことであるかも知れないが、三十三歳で後家になった彼女は後世かなり歪曲して歌舞伎などにとりあげられたことから、もっともらしい話になったのかも知れない。

浅井の血統をひいた彼女であれば美人であつたろう。もう一枚の写真は本多が千姫にラブレターをわたすところの絵である。これは歪曲した後の千姫の姿であろうが、風俗屏風としてはすばらしいものといえよう。徳川黎明会蔵。

日本の歴史の中で美といわれた女性は数多い。その中でも数奇な生涯を送った人物の一人であることはまちがいないが、現代の倫理感のみでその人物をとらえてはならない。再婚などが当然であった時代の女性は、その自分の立場を今の女性以上に認識していたのかも知れない。



〈本多平八郎姿絵屏風〉



〈千姫の墓〉

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円

(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円

(送料不要)

浄土 九月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十九年八月二十五日 印刷
昭和四十九年九月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番

弊会発行の恒例教化トラクト

『ひ が ん 会』 秋季号

新書判・表紙共 12 頁

定価 一部 18 円 (200 部以上 16 円)

送料・実費

彼岸会の施本として広くご利用下さい。

諸経費高騰の折から、今般価格は多少値上げさせて頂きました。
お早めにご注文を頂けますれば幸甚です。

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価 180 円 (〒 70円)

(200部以上 単価160 円 送料実費)

内 容

第一編 法然上人のあゆみ

第二編 浄土宗のおしえ

第三編 信徒の心得

附 法然上人略年譜・参考文献

開宗八百年の聖辰を迎えました。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番